

Sample

はじめに

この本で、私は、「子どもを信じることを基本にした育児について書きました。はじめに、私が診察や面接の現場でとっている「子どもを信じることを」という方針が、自分自身の育児と結びつくことになった、ある出来事を紹介します。

長男が中学三年生の時のことです。その頃、長男は毎朝家を出るのが遅く、学校まで歩いて五分ほどしかかからないのに、しょっちゅう遅刻していました。三者面談で、先生は苦笑いされながら、「私は彼の顔を見るたびに「早く来い、早く来い」と言っているような状態です。おうちでも早く家を出るよう言ってもらえると良いのですが」と、話されました。

普通ならば「すみません」と謝るべき空気なのだということは、私にも分かりました。しかし、私は、効果がないのに同じことを言い続けるといふ先生の接し方に、少し違和感を覚えました。そして、その上で家でも同じことをやるようにとすすめる、その理由を理解し兼ねました。

先生のやさしそうな感じにも誘われて、私は思ったことを正直に話してみました。「遅れることが良くないのは彼もよく分かっていると思います。あくまでも不利益を受けるのは彼自身なので、どうすべきかについては、彼が自分で決めたら良いと、私は考えています」。

すると先生は「しかし担任としては放っておくわけにはいかないのです。この子だけ特別扱いをするわけにもいきませんし」と困ったように話されました。

効果が無いのに同じことを言い続けるというのは、ある意味で放っているのと同じことではないか、と思いましたが、授業だけでなく進路指導や部活の顧問まで、毎日とても忙しくされている先生に、それ以上期待するのは甘えすぎだということも分かっていました。

そこで私は、ふとひらめいて、こう言ってみました。「ならば、いつそのこと「彼是不登校なのだ」と考えていただいてはいかがでしょうか。いつ不登校になってもおかしくない状態であるけれどもなんとか力を振り絞って、少し遅刻しながら、毎朝通ってきているのだと。もしも不登校の子が頑張つて登校してきているのだとすれば、顔を見るたびに「早く来い」と注意し続けることは、先生もしないはずで。その方が、先生も子どもも、楽になりませんか？」

私のこの発言に対して、先生から具体的な返事はなかったと記憶しています。しかし、それよりも、私の方が、自分自身の発した言葉の意外さに、自分で驚いていました。

この面談の後、先生の「早く来い」攻撃は、なくなったようでした。長男は、「父さんがわけの分からんこと先生に言ってくれたおかげで、もう「ハヨコイ」って言われんようになったわ。ありがとう」と私にお礼を言いました。

担任の先生からは、親子ともどもこれではお話にならない、と見捨てられたのかという思いが頭をよぎりましたが、それはそれとして、自分自身が長男のことを信じてきたという点で、そして「毎日学校に通えている子どもにだって、不登校の子どもと同じように接して良いのだ」というアイデ

アをつかむことができたという点で、私にとって非常に貴重な体験となりました。

それ以前から、診察や面接の場面で、子どもの不登校で相談に来られているお母さんやお父さんに對して、私はいつも「お子さんに対して指示や命令の言葉はできるだけ使わないようにしてください」とアドバイスしていました。そして「お子さんを信じて、あまり小言を言わず、できるだけやさしく接するのが良いですよ」とお伝えしていました。

しかし、私自身、自分の子どもたちに対して、いつもそのように接することができていたわけではありませんでした。医師として、またカウンセラーとしては、「子ども」を信じていましたが、一人の父親としては、「自分の子ども」を信じていかなかったのです。

けれども、この三者面談以後、私は、長男をはじめ自分の子どもへの接し方をあらためるようになりました。彼らは実際には不登校ではありませんでしたが、私は、不登校の子どもに接するようになってみただけです。

すると大きな変化が現れました。少なくともわが家の子どもたちに関するかぎり、その効果は明らかでした。親子の関係、兄弟どうしとの関係、そして家の中の雰囲気は、ずっと良くなりました。

それまでも、私は、不登校や引きこもり、リストカットや摂食障害など、子どもの問題について、その親の相談に乗る仕事を、病院での診察や大学の心理臨床センターでの面接において、行っていました。そして、そこで得られた経験や心理学の専門的な知識は、家庭での育児にも活かしていたつもりでした。

しかし、この時、「毎日学校に通えている子どもにだって、不登校の子どもと同じように接して良いのだ」という考えに至り、それまでよりもいっそう「子どもを信じていくことができるようになってから

は、育児の姿勢も、そして診察や面接のあり方も、大きく変わりました。

この本で、私は、「本来子どもが持っている力を信じる」ということを中心に据えて、子どもを育てる時に親が気をつけると良いと私が考えていることを書きました。

ここで、「親が気をつけると良い」と言う場合の「良い」とは、子どもが、親の言うことをよく聞くようになるのか、勉強が好きになるとか、不登校の子が学校に通いはじめるとか、そういったような、なにか親が望むような結果が得られるということではありません。そうではなく、子ども自身が、自分が幸せになるために、なにをどうするのが最も望ましいのかを、自分で感じ、考え、そのこととしてしっかりと向き合えるようになる、ということです。

子どもが家庭で楽しく過ごせること。子どもが自分を好きになること。親も子どもと過ごす時間を楽しめること。子ども時代をそのように過ごすことは、生きることを好きになるために、とても大切なことだと思います。また、生きることを好きになることができた子どもは、たとえば将来大きな困難に出会った時に自殺という方法は選ばないというようなことにも、つながっていくと私は考えています。

私は、日々、診察や面接の場面で、たくさん親と会っています。そして、私や私の妻が毎日悩んでいるのとまったく同じように、どの親も、子どもが幸せになるために、子どもにどう接するのが良いのか、真剣に考えているということに、しばしば胸を打たれることがあります。

しかし、子どもの幸せのために、と親が努力しているまさにそのことが、実は、子どもを、さらに、親自身を、不幸にしているということにも、毎日のように出会います。

そして、これまで多くのケースに出会ってきた経験から見ても、子どもに起こる問題はさまざまでも、親のとるべき態度や方法は、ほとんどの場合同じであるというのが、私がつり着いた考えです。それが、「子どもを信じること」なのです。そして、より具体的に言えば、「子どもに小言を言わず、やさしく接する」ということです。

親が手出しをしなくても、子どもは、自分が幸せになるためにとるべき行動を、自分からとるようにあります。そのことを信じて、子どもと向き合うのです。

本当にそれで大丈夫なのか、小言を言ったり、厳しく注意をしたり、親が導いてやったりしなければ、子どもはどんどんダメな方に進んでしまうのではないか、その結果不幸になってしまうのではないか、等々、不安に思われるかもしれません。けれども、そのような不安をお感じになられる方にこそ、この本を読んでいただきたいと思います。

この本の目的と構成

具体的な方法を提案すること

この本の目的は、「子どもを信じる」という方針に基づいた育児の、具体的な方法を提案することです。

その方法というのは、いたって単純なものです。ひとことと言ってしまえば、「子どもに小言を言わず、やさしく接する」ということです。子どもにやさしく楽しく接しても、大丈夫なのです。そのことを、多くの事例を挙げながら、できるだけ分かりやすく説明していきます。

悩みの仕組みを解き明かすこと

勉強をさせるべきかどうか、塾に通わせるのが良いのかどうか、ゲームの時間を制限した方が良いのかどうか、等々、子どものための思えばこそ、育児の現場では、いろいろな悩みが出てきます。

とはいえ、そのような個別の問題に対して、こうすれば良い、こうしてはいけない、というような、マニュアル的な答えを提示することは、私の本意ではありません。

そうではなくて、なぜそのようなことをめぐって親は悩むのか、その理由、あるいは悩みや苦しみが

生じる仕組みについて、心理学の概念を用いて、事例を挙げながら説明しています。

私の知識と経験のベースについて

この本を書くためのベースとなっている私の知識と経験は、主に四つの形で、子どもと日々接することを通して得られたものです。

一つめは、自分自身の育児です。私は、一人の父親として、上は高校生から下は保育園児まで、四人の男の子を、共働きの妻と一緒に育てています。本文でも紹介しますが、どの子も元気で元んちゃです。とくに一番上と一番下は典型的な「問題児」でした。診断を受ければおそらくADHD（注意欠陥・多動性障害）とされたはずですが、家庭内にとどまらず、学校や地域との関わりを通じて、毎日が、ひたすら実践の日々です。

二つめは、医師として子どもの問題に関わっていることです。私は、研究者としては脳科学を専門としてきましたが、病院では臨床医として一般的な内科の診察も担当しています。主に心療内科的な診察が中心ですが、風邪や腹痛、予防接種などで受診する子どもたちや、その親との出会いからも、実に多くのことを教えられてきました。また、不登校、引きこもり、過食や拒食といった摂食障害、リストカット、解離性障害など、さまざまな問題について、たくさんの子どもやその親の診察を担当してきました。

三つめは、臨床心理士を養成する大学院で、面接技法やカウンセリングの理論、精神医学などの指導をしてきた経験です。そこでは私自身もカウンセラーとして、大学の心理臨床センターで、主に親面接

を担当しました。カウンセリングでは、病院での診察とは違って、時間的な余裕を持って、子どもや親と接することができます。はじめのうちは、精神疾患のある方や、主に医学的な問題で相談にいられた方を担当していました。しかし、センターのスタッフの中で育児経験がある人がほとんどいなかったということもあり、次第に不登校や引きこもりなど子どもの問題で相談にえられる親の面接を担当するようになりました。

そこで、臨床心理士であるスタッフの方々と一緒に働けたこと、そして、大学院生の指導やケース（症例）の考え方について、駒米勝利先生こまけまさひとにいろいろと御指導いただけただけことは、私にとって本当に幸運なことでした。「症状はその人にとって大切なものである」という駒米先生の教えは、それまでの私の診察のスタイルまでも大きく変えることになりました。

また、育児において、私が「子どもを信じること」ができるようになったのも、相手を信じることで相手を支える駒米先生のスタイルに触れさせていただけたおかげです。

やがて私はカウンセリングの持つ力に魅了されていきました。そして自分も臨床心理士の資格を取りました。カウンセリングについて学び実践していくうちに、病院での医師としての診察のスタイルも、変わっていきました。

以前の私は、「医学的に正しい知識や方法を、いかに効率良く患者さんに説明して納得してもらうか」ということを目指していました。しかし今では、「この人はどのようなことを問題であると考えているのか、そしてそのことをどのように感じているのか」ということを、まず考えるようになりました。

四つめは、かれこれ十年近く、ボランティアで近所の子どもたちと毎週フットサルをしていることで

す。このサークルには三十名ほどの小学生が参加していて、週二日、夜二時間、近くの小学校の体育館を借りて行っています。

もともとは、自分の子どもが夜に家でテレビを見たりゲームをしたりするよりは身体を動かした方が良いのではないかと考えて、子どもを友だちも誘って、ジョギングをはじめたことがきっかけでした。そうこうするうちに、ただ走るよりはボールを追いかけた方がもっと楽しいということで、体育館でフットサルをするようになりました。

子どもたちを三チームに分けて、五分間のゲームを勝ち残りでえんえんとやります。そこで私は、技術的なことはもちろん、挨拶さえ指導しません。さらに、片付けは基本的に私がやります。ただただ遊ぶために子どもたちはやってきて、駆け回って帰っていきます。

私は舞台の端っこに座って時間を計っています。私の横に子どもたちは寄ってきてくれて、「あのさあ、おっちゃん……」と、いろいろな話をしてくれます。私の至福の時間です。

家庭でも学校でも病院でもない場で子どもたちと接する体験は、私に、つねに「どの子ども魅力的で素敵だ」ということを教えてくれます。

私の子どもに関する知識や経験の源は以上のようなものです。実際のところ、子どもの問題について私よりもずっと詳しい医師やカウンセラーは、たくさんおられると思います。しかし、やんちゃな男の子を四人育てているさなかにあって、さらにたくさんの子どもたちと遊びを通して接し続けている医師かつ臨床心理士となると、それほど多くないのではないかと思います。

この本は、父親として、医師として、臨床心理士として、そして、遊びサークルのおっちゃんとしての経験に基づいて書きました。

さらにもう一つ付け加えるならば、右の四つの現場を介して、私自身が、自分自身の子ども時代を振り返り、自分の親と自分との関係を捉え直したり、自分自身を育て直したり、といったようなことも多々ありました。そうしたことも、この本には、できるだけ盛り込むようにしました。

子どもの問題の多くは歓迎すべきもの

ところで、ここまで、すでに何箇所かにおいて、私は、「子どもの問題」と書きましたが、「問題」と言っても、それらはけつしてネガティブなものではなく、むしろ、それらの多くは歓迎すべきもの、子どもによるSOSの表現であると、私は考えています。

表現されることがなければ、そこに問題があることに周囲が気づくことはありません。たとえば不登校は、それまで苦しかった子どもが、自分を助けるために、勇気を出してとった行動だと言えます。

その意味では、自尊心を傷つけられ続けていても我慢して学校に通っていることの方が、問題としては、より深刻である場合もあります。

子どもの問題に本は役に立たない？

私が望ましいと考える子どもへの接し方や、子育てが上手くいっている親に共通する態度のようなものについては、すでに多くのカウンセラーや医師が、たくさんの本を書いておられます。

実際に、私も、面接に来られた保護者の方に、しばしばそのような本を紹介しています。私の勤務する病院の近くの本屋さんには、よく患者さんに紹介する本（たとえば、長谷川博一『魔法の「しつけ」』などを、つねに在庫を切らさず置いてもらうようにしています）。

長谷川博一先生は、『お母さんはしつけをしないで』（草思社文庫、二〇一二年）、『ダメな子なんていません』（新潮文庫、二〇〇九年）などの本でも、大切なことを、いずれも分かりやすく書いておられます。私自身、仕事においても家庭においても、大いに参考にさせていただいています。はじめて『魔法の「しつけ」』（PHP文庫、二〇〇八年）を読んで長谷川先生のお考えを知ってから、子どもの問題についての私の考え方は大きく変わりました。そして自分自身の育児が楽しくなりました。

しかし、そのような本には、たいへん分かりやすく適切なことが書かれているにもかかわらず、相談に来られた方にそれらの本をすすめても、思ったほどの効果がない場合がほとんどです。

それはなぜでしょうか。いくつかの理由が考えられますが、一番大きな理由としては、親が、自分自身の抱えている問題を、無意識のうちにはあれ、認めたくないがために、本の内容が上手く頭に入らない、ということがないように思えます。「自分が責められているような気がして、途中から読めなくなっていました」と、正直に話された方もおられました。

というわけで、子どもの問題に関して、現実困っている渦中にある親にとっては、本を読むという方法があまり役に立たないということは、医師としても、臨床心理士としても、身にしてみ分かっていくつもりです。

しかし、それでもなお、今回このような本を書くこと考えたのは、この本の「はじめに」で述べたよ

うに、「不登校の子でなくても、不登校の子に接するように接しても良い」という考え方に、私が一定の確信を持っているからです。そして、同じようなことが、子育てについて悩んでいる親についてもあてはまるのではないかと思うからです。

すなわち、すでに子どもに問題が出ているような場合は、本を読むことはあまり役に立たないかもしれないませんが、「まだ問題は出ていなくても、子どもへの接し方について悩んでいる親」に対して、「子どもを信じることを基本にした育児を提案することは、それなりに有効なのではないか、と考えるからです。

また、この本を原稿の段階で読んでくださったある方は、「自分は子どもを育てる自信がなく、子どもを持ちたいと思いませんでした。しかし、この本に書かれているように「薬に子どもに接しても良い」という考え方を知って、子どもを育ててみたいと、はじめて考えるようになりました」と、私に話してくれました。そういった意味では、育児をされていない方でも、この本をお読みいただいで、いろいろと考えていただけるのかもしれない。

ふだんから子どもにやさしく接する

不登校になっていない子どもに対しても不登校の子どもに接するように接しても良いという考え方に ついて、少し別のたとえを試してみます。

たとえば、癌が発見されて、手術や放射線治療、抗癌剤投与などの治療が始まると、それまでの生活を見直して、健康を心がけた生活をはじめの方は多いと思います。たばこを吸っていた人が禁煙をはじめたり、野菜をこれまでより多めに摂るよう心がけたり、といった具合です。あるいは、早寝早起きや適度な運動をするなど、それまで健康を心がけずに暮らしていた方にかぎって、急にライフスタイル、生活習慣をあらためます。

そして、そのような人たちは、「もつと前から、このような健康を心がけた暮らしをしていたら良かった」と、残念そうに話されるのです。

私は、子どもの問題についても、同じようなことがあてはまると考えています。たとえば、それまでもずっと苦しいことが続いていた子どもが、ようやく自分の苦しみを、不登校やリストカットなどの形で表現したとします。ここではじめて、親や周囲の大人は、子どもの苦しみに気づきます。

ここで、上手くいけば、親は子どもに接する態度をあらためて、彼らを元気にすることができるともいけません。実際に、子どもの苦しみの原因が親の接し方や親と子の関係にある場合はもちろんのこと、それ以外の場合でも、親からやさしく接してもらうこと、すなわち愛情を与えてもらうことで、子どもがエネルギーを蓄えて、問題を乗り越えられるようになります。

それならば、病気になるってから後悔しないために、ふだんから身体を大事にすることが大切なのと同じように、子どもの元気がなくなってしまう前から、そもそも、私たちは、はじめから、子どもが元気になるように、やさしく接すれば良いのではないのでしょうか。

この本の構成

次に、この本の構成を簡単に紹介しておきます。この本は、以下のような三部から構成されています。

I 診察や面接で気がついたこと

ここでは、まず、私が診察や面接を通して気がついたこと、とくに子どもの問題の原因となりやすい親の姿勢などについて書いて書いています。

さらに、この本の基本となっている考え方について紹介しています。

II 親子の関係

ここでは、まず、親の子どもに対する心理的な距離によって問題の現れ方が変わってくることを、「近すぎる親」「遠すぎる親」という、ある意味で対極にある、二つの親子関係から説明します。

さらに、子どもに失敗させまいとして、親が子どものことにいろいろと手を出したり、子どもの行動を制限したりすることにはどのような問題があるのか、という点について説明します。

また、防衛機制ぼうえんきせいという考え方についても説明します。防衛機制というのは、基本的には、自分を守るための無意識の心の働きのことです。この防衛機制は、かつては有害なものという受け止められ方をしていました。子どもの発達において、あくまでも正常な心の機能として、誰にでも現れるものであることなどが分かかってきて、最近は扱われ方も変わってきています。ここに挙げている防衛機制のバリエーションとその具体的な例は、日常生活の中で、ごく普通に見聞きするようなものばかりです。

III 子どもとのコミュニケーション

ここでは、まず、子どもとのコミュニケーションで気をつけるべきこと、子どもの話を聞く時に注意したら良いことについて説明しています。

さらに、子どもに対して、指示や命令の言葉を使うことを控えて、その代わりに、思いや考えを伝えるような言葉を使うことによって、子どもに起こってくる変化の具体的な例などをいくつか説明します。

また、相談事例などで見られた子どもの変化を紹介しながら、子どもに対してどのように接していくのが望ましいか、子どもに対して私たちがなげなくとってしまっている態度にどのような問題があるのか、などといったことについて、具体的な場面でのやりとりや事例を紹介しながら説明します。

そして最後に、私が考案した、「アイスクリーム療法」という子どもを元気にする方法を紹介しています。

以上が三つの部の概要ですが、それらに含まれる一つ一つの章については、単独のエッセイとしても読めるような、どちらかと言えば、ゆるやかなスタイルで書き下ろしました。したがって、最初から順を追って読み進める以外に、興味を持ったところ、読みやすそうなところから、好きなようにページを開いて読みはじめていただくというのでもかまいません。

この本に書かれてあることは、いずれも、頭で理解することは簡単であっても、実際の場面で実行することは、とても難しいことだと思います。

実際のところ、私自身も日々葛藤の中にあります。とはいえ、読んでいただいたみなさんの、親子で過ごす時間が少しでも楽しいものになれば、そして、子どもも親も笑顔が増えるようであれば、この本

Sample

を書いた意味があると私は考えています。

なお、事例として具体的なケースを紹介する場合には、プライバシーに配慮して、本質を損なわない程度に変更を加えています。この本の趣旨を理解していただき、診察や面接の内容の一部を紹介させていただくことをご了解くださいました多くのクライアントや関係者の方々に感謝いたします。

『子どもを信じること』を書き終えたところで、私の頭に浮かんでいることを、最後に書いておきたいと思います。

この本で私は、子どもにやさしく接することが大事と書きました。しかし、実際に、一日中、一年中、子どもと一緒にいたら誰でも分かることですが、子どもにやさしく接するということは、本当に難しいことです。

たとえば、娘さんの問題について数年にわたって面接に通われていたあるお母さんは、次のように私に話されました。「先生の言われるように娘に接してきたことで、娘は本当に元気になってきました。このように接していくのが良いということは、本当によく分かりました。しかし、私自身は、自分の母親からこのように大事にしてもらった記憶がありません。それどころか、母の私に対する言葉や態度を「あれはあんまりだった」と毎日のように思い出します。娘にやさしくしている自分は、すごく無理をしているように感じる場合があります。今でも突然、全部放り出したくなる、めちゃくちゃにしたいくなる、そんな気がする場合があります。私は私をどうしたら良いのでしょうか」。

このような正直な思いについて、どのような言葉を返したら良いのか、私はその時、なにも話すことができませんでした。

この本を読んでいただいた方も、子どもにやさしく接しようとした時に、このような思いを持たれることがあるかもしれません。

ここで私に言えることは、次のようなことだと思います。

すでに本文で何度も書いたことですが、自分はこのような複雑な思いを持っている、ということ意識しながら子どもに向き合うこと、それがまず大事だと思います。

そして、実際にやさしく接することができなくても、「やさしく接しても良いのだ」「厳しく接する必要はないのだ」ということを意識することで、自分も子どもも変わっていくと思います。たとえ、実際にはやさしく接することができなくても、多少厳しく接してしまうことがあっても、子どもに向き合う時の自分の姿勢を意識するだけで、あなたも子どもも、そして親子の関係も、違ってくるのです。このことをいつも心の片隅にとめておいていただいたら良いのではないかと思います。

さらに、親であるあなた自身も、かつては子どもであったということ、思い出してみてください。目の前にいる子どもと同じように、かつてあなたも無邪気で幼い子どもだったのです。そして、いろいろな困難に出会いながら、自分の親だけではない、いろいろな人に支えられながら、持っている力を十分に発揮して、必死で生き延びてきたのです。その上で、今もすばらしく生きていくということ。その事実、とても大切な、とく貴いことだと、私は思います。

子どもに厳しく接してしまいそうな時に、私はいつも、次のようなことを考えます。もしも仮に、自分が幼かった頃、このような場面で、親からやさしく接してもらっていたら、はたして、自分は今より、ダメな大人になってしまったらどうか、それとも、幸せな人間に育ったらどうか、と。そして今、自分

は、親として、そのような場面をやり直せる立場にあるのだ、と。

あなたが子どもにやさしく接している時、子どもを大事にしている時、あなた自身の心の一部は、あなたの子どもに溶け込んで、一体になっているのです。そして、今は親となっている自分から、子どもとして、愛情を受け取っているのです。子どもにやさしく接すると、なぜか自分も、気持ちが良くなったり、幸せな気分になれるのは、そういう仕組みなのではないかと、私は考えています。子どもを大事にすることは、自分が子どもであった過去に遡^{さかのぼ}って、子どもの頃の自分のことも大事にしていることになるのではないかと、私は思います。

結局のところ、子どもを信じる、ということは、かつて子どもであった自分を信じることで、そして、今の自分を信じることもあると、私は思います。自分を信じて、そして、子どもを信じて、親として子どもに接していくことが、子どもを幸せにすることにつながると、私は考えています。

最後に、この本が作られることになった経緯について書いておきます。

京都府の南部、木津川市というところに、「数理言語教室は」という学習塾があります。寺子屋のようなスタイルでユニークな教育を実践されている、とても面白い塾です。わが家の子どもたちも、そこでお世話になっているのですが、二〇一〇年の春に、その「ば」で、「子育て心理学講座」と題するシリーズ講義が開催されました。

「ば」を主宰されている石橋英樹先生から、当初は、脳科学について、子ども向けの講義をしてもらえまいかと、お話をいただいたのでした。私としては、親を対象にした、育児心理学の講座をやってみたいという思いがありました。そこで私は、「子育て心理学講座」と題して、全三回の講義をすること

を提案し、石橋先生から了承を得ることができました。講座には保護者の方が大勢参加されて、質疑応答の際の意見交換は、毎回、非常に切実かつ興味深いものとなりました。

この講座に、石橋先生のご友人である大隅書店の大隅直人さんが、オブザーバーとして参加してくださいました。そして、講義の内容と、そこでの活発なやりとりを印象深いものと感じてくださり、この内容を本にされてはいいでしょうか、というご提案をいただきました。それが、この本を書くことになったきっかけです。

貴重な機会を与えてくださり、講座の企画・運営から、出版のための原稿の準備まで、始めから終わりまでご助力いただいた、「ば」の石橋先生、南野和俊先生、そして大隅さんに感謝します。

また、草稿の段階で、忙しい中、時間を作って、それをていねいに読んでくれて、忌憚^{きたん}ないコメントやアドバイスをくれた藪下遊さん、新風堂書店の中田睦子さん、そのほか複数の同僚や旧友にも、感謝の意を表したいと思います。さらに、校正者の上念薫さんのおかげで、私自身の考えもより深まったと思います。ありがとうございます。

プライバシーに配慮して、本質を損なわない程度に変更を加えてありますが、事例として紹介することにご同意くださった、クライエントの方々や友人の皆様にも感謝いたします。

そして、日々、私に、生きる喜びとともに、私自身を成長させるものとなるものを、つねに与え続けてくれる妻と四人の子どもたちへ。ありがとうございます。

二〇一一年八月

田中茂樹

子どもを信じること

2011年9月20日 第1刷発行

著者 田中茂樹
発行者 大隅直人
発行所 大隅書店

〒520-0806 滋賀県大津市打出浜2-1 コラボしが21 407号

電話 077-523-7773

振替 00930-9-272563

<http://ohsumishoten.com/>

組版者 田中 聡 (TSスタジオ)

校正者 田中奈保生 上念 薫

装画者 岡田千晶

装幀者 加藤恒彦

印刷所 共同印刷工業

製本所 藤沢製本

協力 石橋英樹 南野和俊 風木一人

© Shigeki Tanaka 2011 Printed in Japan
ISBN 978-4-905328-01-8

田中茂樹

(たなか・しげき)

1965年、東京都生まれ。4歳から高校卒業まで徳島県で育つ。京都大学医学部卒業。京都大学大学院文学研究科博士後期課程（心理学専攻）修了。文学博士。2010年3月まで仁愛大学人間学部心理学教授、同大学附属心理臨床センター主任。専門領域は、fMRIを用いた高次脳機能の研究および失語や健忘などの高次脳機能障害。現在は、医師・臨床心理士として、地域医療、カウンセリングに従事している。著書に、『認知科学の新展開4 イメージと認知』（共著、2001年、岩波書店）、『自己心理学4 認知心理学へのアプローチ』（共著、2008年、金子書房）、『よくわかる認知科学』（共著、2010年、ミネルヴァ書房）などがある。

Dies ist ein WWF-Dokument und kann nicht ausgedruckt werden!

Das WWF-Format ist ein PDF, das man nicht ausdrucken kann. So einfach können unnötige Ausdrücke von Dokumenten vermieden, die Umwelt entlastet und Bäume gerettet werden. Mit Ihrer Hilfe. Bestimmen Sie selbst, was nicht ausgedruckt werden soll, und speichern Sie es im WWF-Format. saveaswwf.com

This is a WWF document and cannot be printed!

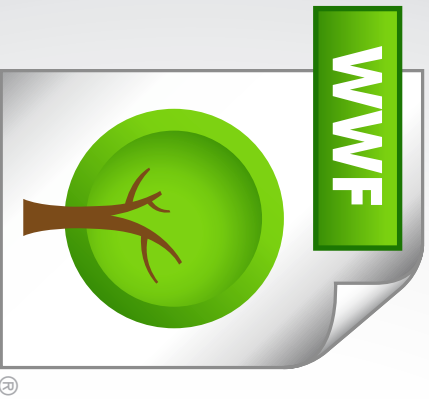
The WWF format is a PDF that cannot be printed. It's a simple way to avoid unnecessary printing. So here's your chance to save trees and help the environment. Decide for yourself which documents don't need printing – and save them as WWF. saveaswwf.com

Este documento es un WWF y no se puede imprimir.

Un archivo WWF es un PDF que no se puede imprimir. De esta sencilla manera, se evita la impresión innecesaria de documentos, lo que beneficia al medio ambiente. Salvar árboles está en tus manos. Decide por ti mismo qué documentos no precisan ser impresos y guárdalos en formato WWF. saveaswwf.com

Ceci est un document WWF qui ne peut pas être imprimé!

Le format WWF est un PDF non imprimable. L'idée est de prévenir très simplement le gâchis de papier afin de préserver l'environnement et de sauver des arbres. Grâce à votre aide. Définissez vous-même ce qui n'a pas besoin d'être imprimé et sauvegardez ces documents au format WWF. saveaswwf.com



SAVE AS WWF, SAVE A TREE